

とくいく「禅語」十一

油断（ゆだん）

油断をしないという言葉は、「気を抜かない・隙を見せない・気を許さない・注意を怠らない」といったような意味です。「油断」という言葉は、油を断つと書きます。涅槃行（ねはんぎょう）という経典の中に、「王様は一人の家臣に油を一杯に注いだ鉢を持って遠い道を歩くように命令され、その家臣におまえは、もし鉢を傾けて一滴でも油をこぼしてしまったら、お前の命を断ってしまうぞと言われました」

ブッダはこの話で教えを会得することはその状況と同じくらい気の抜けないことなのである。それ位、本気でなくてはならない。油をこぼしてしまったら命を絶たれてしまう位の真剣さで、日々の修行を行いなさい。すなわち、日々の生活を「油断しないで」過ごしなさいということを云われました。

また、鉢を「傾けない」という意味は、単に器の角度を指しているのではなく、生き方を傾けてはいけないという意味も含まれています。教えを説いたブッダは、「生老病死・しょうりょうびょうし（人生における四つの思いようにならないこと）」の苦悩と人間の「享乐的・きょうらくてき（快楽にふける様子や態度）」な生き方に虚しさを覚えて出家しましたが、その苦行という生き方にも安らぎを見いだすことができませんでした。

そして、たどり着いた境地が「中道」という極端なものに自分の心を傾けさせないように、常に自分の心を真ん中に置いて（ニュートラルにして）生活する生き方をすることが大事である。怠けてはいけなくとも、頑張りすぎるのも良くない。心配して気にかかることは大切だが、心配し過ぎて心が委縮することは良くない。こういった思考も行動も偏らないように気をつけること、「これが器を傾けて油をこぼさないように」という言葉のもう一つの意味です。

また、油断（油を断つの意）は、火に油を注げばよく燃えます。何十年、何百年とかけてできた森の木々も、小さな火種に油を注げば一日でそれを燃え尽くす怖さを秘めています。もし自分の身の周りに火種（問題）があれば、油をこぼすような傾いた生き方をすれば、大事なものを燃え尽くすことになり、取り返しがつかないのです。

今、新型コロナウイルス感染症の問題が世界を席卷し日本の社会に大きな不安と負担を与えています。私たち一人一人の意識、行動一つで終息に向かいのか、拡大に向かうのかの岐路に立たされています。

「油断」という禅語は、現在の社会状況の中で、気を抜かないこと、注意を怠らないことだけでなく、必要以上に不安感や恐怖心を抱いて心が委縮しないように、心が傾かないように「平常心・へいじょうしん（ふだんと変わることなく、揺れ動くことのない心）」を保ち生活することが大事なことだという意味です。